

リベラル・アーツ教育は、いま



さいとう こど
齊藤 言子
神戸女学院大学学長

はら みちお
林 道郎
上智大学国際教養学部
長

広く深い知識と教養を備えた人材を
育成するリベラル・アーツの理念

山田 本誌の2007年9月号で「リベラル・アーツ教育のこれから」をテーマとする特集を組み、「戦後日本の大学教育では、米国のリベラル・アーツを参考として、いわゆる一般教育、一般教養、共通科目といった名称で大学教育に組み込まれてきたが、多くの場合、本来のリベラル・アーツ教育の表面的な導入となっていないか」といった問題提起がなされました。記事では「何を教えるかよりも、どうやって教えるかが重要である」、さらに「『広く浅く』の一般教育と、『狭く深く』の専門教育とを組み合わせた教育方法が、『広く深く』を求める時代に移る」という指摘がなされてい



司会

山田 健太

専修大学文学部教授、
総合政策センター広
報・情報部門会議（大
学時報）委員

上田 紀行

東京工業大学リベラル
アーツ研究教育院長

市川 伸一

東京女子大学現代教養
学部教授

ます。

2007年以降、国からさまざまな教育改革が打ち出されましたが、そこで求められている学生の主体的な学習のあり方や、求められる人間像は、まさに広く深い知識と教養を備えた人材を育成するリベラル・アーツの理念と一致するといえるのではないでしょうか。

しかし、先進的な取り組みを進めている大学がある一方、いわゆる「一般教養」的なカリキュラムを継続している大学も少なからずあって、二極化しているように感じます。改革に伴って教育の現場には混乱もみられる中で、本日はリベラル・アーツ教育について改めて考え、それが社会にどのような貢献ができるのか、探っていきたいと思っています。

**リベラル・アーツは、自分を解き放ち
多様な視点を与えてくれるもの**

市川 私 は2007年の特集に記事を執筆しましたが、10年たつて振り返ってみると、当時考えたことはいまそのまま生きていると感じました。

まず、リベラル・アーツとは何かという点です。「リベラル」はラテン語の「リベール (liber)」から来ていますが、これは「free」すなわち解き放つという意味があります。「アーツ」はよく誤解されますが、ラテン語の「アルス (ars)」、これは「ability」という意味が背後にあり、能力ということです。ですから、二つを合わせて「リベラル・アーツ」になると、その人の中にあるいろいろなものが自由に解き放たれるという動作を指しているのです。自分の中にある能力や個性、獨創性、創造性といったものの無限の可能性を引き出すということだと思っています。

リベラル・アーツのもう一つの側面は、多様な視点から物事を考えるということと、こちらのほうが一般的なイメージでしょう。この二つは密接につながっており、多様な視点を持てるようになったことがきっかけとなって自分の能力が引き出され、新しい発想が生まれ、それがまた新しい視点につながるという仕組みです。「自由に解き放つ」ということと「多様な視点」という二つが互いに刺激し合って発展していく、そ

れがリベラル・アーツ教育ではないかと思っています。

この10年でリベラル・アーツ教育に関する議論が進み、カリキュラムの工夫や改善がみられます。そこで問題なのは、学生と教員の意識改革が進んでいないということです。「先生が教え、学生が学ぶ」というかたちから、共に学ぶ仕組みに移行できて初めて、リベラル・アーツ教育が成り立ちます。

私は長い間、米国の大学で教えました。が、教員と学生の質疑応答が活発だということには皆さんご存じだと思います。多くの学生が「自分を大いに鍛えてほしい」という気持ちで授業に臨んでいる、いわば道場のようなものです。

これは、教員の側も同様です。自分に厳しい質問をしてもらい、自分自身を鍛えることが研究にも役立つという視点を持っています。

米国の新しい動きとしては、大学院の博士課程こそリベラル・アーツ教育が必要であるというものです。なぜなら、世界でもトップレベルの研究を進める上では、最先

端であるが故に、他に参考にできるものがなく、自分で考えなくてはいけない。そこで、例えば理系のノーベル賞受賞者の足跡をたどると、専門外のことからヒントを得て不連続的飛躍を成し遂げたというケースが多いからです。

私は、大学教育のインテグレーション(統合的教育方法)が必要だと思います。学部も大学院も、リベラル・アーツ教育という土台の上に専門教育を積み重ねて、相互乗り入れをしながら教育を進めていくと、非常に発展性があるのではないかと思っています。

**幅広い対象について、多角的に学ぶ、
という方針を守り続けて**

山田 2006年に上智大学に国際教養学部ができてから、他の大学でも同じような名称の学部が増えたように思いますが、この10年を振り返って、いかがでしょうか。

林 国際教養学部の前身は比較文化学部、さらにその前は占領期の1949年にできた国際部というように、英語だけでなく続いてるリベラル・アーツのプログラム

ということでは、日本でもユニークな位置付けになると思います。

かつて、比較文化学部のキャンパスだけが東京の市ヶ谷にあったのですが、国際教養学部に移転するときに四谷キャンパスに移転し、他の学部とまさにインテグレートするという大きな出来事がありました。改組の前後で変わったことや変わらなかったことがあります。

変わらないのは、比較文化学部自体が多様な分野が統合してできた学部であり、学生は「ヒューマニティーズ」「ソーシヤルサイエンス」「インターナショナル・ビジネス・エコノミクス」の三分野それぞれを学ばないと卒業できない仕組みです。リベラル・アーツ・エデュケーションということでは、いろいろなものを多角的に学ぶという方針を大事にしてきました。

また、メジャーに入る前、1・2年次のコアプログラムで、クリティカルシンキング、いまはシンキングプロセスと呼んでいますが、それとライティング、書く力を高めることを重視するという伝統を守っています。本学部の卒業生に、一番印象に

残っている授業を聞くと、クリティカルシンキングという答えが多いですね。

そこでは、先ほど市川先生がおっしゃった質疑応答を非常に重視しています。1クラスを20人程度に抑えて、かなり密度の高い対話をしながら授業を進める構造になっています。本学部はずっと少人数教育を大事にしており、講義は最大でも1クラス100名前後です。4年間で、ほとんどの学生が顔と名前を覚えるようです。

3分野からバランスよく学ぶ リベラル・アーツのカリキュラム

山田 神戸女学院大学も昔から取り組んでいらつしやいますね。

斉藤 神戸女学院大学は、今年で創立142年になります。新制大学の認可を受けたのは1948年ですが、それ以来、リベラル・アーツ教育を前面に出して力を入れてきました。

本学は女子大ですが、女性と男性と比べて直線的な道を歩むことが困難です。卒業後の長い人生の中、さまざまな事情から、自分が描いていたキャリアの方向を転換せ

ざるを得ない場合があります。その時々、置かれた立場で自分の能力を最大限に発揮して世の中に貢献できる人材を育成するというのが、本学の一貫した目標です。

本学は、新制大学として認可された当初から文学部（英文、社会、家政学科）、音楽学部がありましたが、いずれの学部の学生も人文科学・社会科学・自然科学の3分野全てに必修科目があり、バランスよく学習するカリキュラムを設けてきました。こうした学びを通して、自らの資質を十分に生かし、一個人として成長していこうというものです。また、本学はキリスト教主義の大学であり、全ての人の善き隣人として生きていくということが根底にあります。

物事を多面的にとらえて、異なる視点から見られるようになること。そして、それに対して怖がらない、躊躇しない姿勢を持つことが、自分を育てていく上で大きな柱になると考えます。

本学は、学部・学科を超えて、多分野を系統的・重点的に学ぶ学部横断型の三つの特色プログラムを設けており、いずれも全学生が対象になっています。一つ目の「通



林 道郎氏

訳・翻訳プログラム」は、TOEICのスコアの条件をクリアすれば受講できます。通訳・翻訳の技術を学ぶことによって、英語運用能力はもちろん、集中力や判断力を身に付けられるカリキュラムになっています。二つ目の「キャリアデザインプログラム」には、メディア・コミュニケーション、アート・マネジメント、ホスピタリティ・マネジメントの3コースがあり、各コース15人の徹底した少人数教育制をとっています。例えば、音楽学部が学生がメディア・コミュニケーションを学ぶことにより、音楽評論を書いてみる。英文学科の学生がホスピタリティ・マネジメントを学ぶことを



斉藤 幸子氏

通して、ホテル業界や航空業界への理解を深めることもできます。三つ目の「地域創りリーダー養成プログラム」では、学生は地域の子どもたちと接することによって地域理解やコミュニケーションの大切さなどを学び、専門分野を超えて人間的な成長を実感しています。

**学生の構成が変化して
多様性が増した上智大学**

林 上智大学の国際教養学部でも、もちろん変わったこともあります。以前は学生の8割が外国籍でした。バブル期に海外へ赴任するサラリーマンが増え、帰国子女の学

生が増えた結果、1990年代末には日本人学生が上回るようになりました。現在でも、学生の7〜8割は日本人です。しかし、帰国子女はそれぞれ日本とは全く違うカルチャーを持っていて、共通語も英語です。もう一つは、この10年でアジアからの学生が圧倒的に増えました。中国籍の学生や、東南アジア各国のインターナショナルスクールに通っていた学生が増えたため、学部内のカルチャー・ダイバシティというか、多様性が広がりました。従来は欧米系の学生が多かったところに、アジアからの学生が増えて、非常にもしろい状況が生じています。

こうした環境でリベラル・アーツを教えることは、とても重要だと思います。価値観の異なる学生同士が対話をしたり、教員と学生が話す際に、物事を広く見ることできたり、異文化を理解できるようになるためのプログラムがあることが大事です。

特に宗教問題などがそうですが、イスラム系の学生と米国南部から来た学生が授業の中で強い感情的対立を起こすこともあって、教員は調停をしながら、それを題材に



市川 伸一氏

して授業を進めるといいう、かなり緊張を強いられる日々ではあります。宗教や美術、文学、経済学や社会学といったことを学び、それが授業を通した経験と直結しながら、多角的な価値観を醸成していくという、ある意味でいい環境だと思います。

また、ライティングはやはり重要です。自分の考えを書くためには、それをロジカルに説明できなくてはいいけないし、書いたものは他人に共有され、反論が来たら答えるというプロセスが、リベラル・アーツ教育の中では非常に重要だと思って力を入れています。

ただし、問題もあります。いわゆるスー



上田 紀行氏

パーグローバルという動きの中で、大学としては留学生を増やしていかなければならない。本学の場合、海外の協定校を増やすと、向こうから来る学生も増えます。全部英語で授業をやっているのは学内でも本学部がほとんどなので、上智大学に留学してくる学生のほとんどは本学部に来るという結果になります。現在、年間300人以上の交換留学生を受け入れています。対応が限界に近づきつつあります。

本来、これは歓迎すべきことであり、こうした多文化状況によって学部内が活性化する反面、少人数教育の伝統を守ることが難しい状況に立たされているというのが現



山田 健太氏

状です。

世界でも超一流といわれる人は豊かな教養を身に付けている

斉藤 2014年には、リベラルアーツ＆サイエンスプログラムという副専攻プログラムが加まりました。これは、条件を満たせば他学科の専門分野を学ぶことができるもので、例えば英文学科の学生が音楽学科の学生と同じ専門の個人レッスンが受けられます。また、他学科の学生が音楽学部の定期演奏会で同じステージに上がり、英語のナレーションが必要な曲では英文学科から指導を受けた音楽学科の学生がナレー

シヨンを担当するという、リベラル・アーツの成果が分かりやすく見える形となって表れています。

2017年度から、五つの科目群による新しいリベラル・アーツ教育がスタートします。全学生が必修の「コア科目」は、キリスト教と英語、第2外国語、そしてITと体育です。さらに、1年次から「クローパーゼミ」(三つ葉のクロオーバーは身体・精神・靈魂を表す本学の校章)が開講されます。

これは、一つのトピックに対して人文科学・社会科学・自然科学の3分野からアプローチする科目であり、各学部の教員が3人1組になって1科目を順番に展開していくというものです。このコア科目に加えて、選択科目である「オープン科目」や、より深い学びを目指す「マイナープログラム」、そして各学部・学科の「メジャー(専門)」という構成です。

私は音楽学部の出身で、オペラが専門ですが、世界でも超一流といわれる演奏家たちは、豊かな深い教養が身に付いている方が多いように思います。一つのことを極め

る過程で、リベラル・アーツがどうしても必要になってくるのでしよう。ですから、深い専門性とリベラル・アーツの両方を学ぶ意味は大きいと確信しています。

1年生から博士課程まで、 全学生にリベラル・アーツ教育を

山田 東京工業大学も、ユニークな取り組みをされていらっしやいますね。

上田 本学は理系の国立大学であり、そういう意味ではリベラル・アーツからは遠いところにあるように思われることがあるかもしれませんが、こうして議論の輪に加えていただいたことを大変うれしく思っています。

本学は学部課程の1学年が1100人で、卒業後は9割が大学院に進み、他大学から来た学生や留学生も加わって、修士課程では1学年1500人になります。博士課程が500人で、全学1万1000人の学生に対して教員が1100人という規模の大学です。

2016年4月1日に、リベラルアーツ研究教育院が発足しました。これは、学部

の1年生から博士課程の3年生まで、全学生のリベラル・アーツ教育を担当する新しい部署です。つまり、全学生にリベラル・アーツ教育を行うことを大学の方針として決定し、その1年目が始まったことになりました。

本学は、1944年に和田小六という有名な学者が学長に就任し、これからは教養をやらなくてはいけないと宣言しました。そうして、著名な先生方、例えば伊藤整や心理学の宮城音弥、KJ法の川喜田二郎、後に文部大臣を務めた永井道雄、経済学の永井陽之助、江藤淳といったそうそうたる方々を集めたのです。

こうした教養教育の黄金時代がありましたが、当時は各先生の個人的なパワーに負っていた部分も大きかったと思います。その時代に学んだ卒業生からは、大学で文系の授業を受けて目を開かれたという話をよく伺います。

その後、大学の重点化がいわれるようになり、1966年頃からは教養の先生方が大学院の教員となりました。大学は世の中の役に立たなければいけない、そのために

は専門教育をなるべく前倒しでやらなければいけないという風潮が、新自由主義的な「研究資金を集める力のある大学」という考え方と合致したのです。

そこで、本学では1996年に改革が行われましたが、20年後の2016年に、教養教育のコアとなる組織を再構築しようということになりました。2030年までに、本学を世界のトップ10に入るリサーチ・ユニバーシティにすると言言し、その一つの柱としてリベラル・アーツ教育を再構築しようとしています。

そもそもリベラル・アーツとは何か、理工系でも必要なのかといったときに考えなくてはいけないのは、先ほど市川先生がおっしゃった、「自分の能力を解き放つ」「人間を自由にする技」という部分です。何かのシステムに従うような存在ではなく、自由な人間として考え、発言し、行動し、世界を変えていく。その自由人としての資質を与えるもの、人を自由にしてくれる技としてのリベラル・アーツという面を、われわれは大いに強調しています。

リベラルアーツ研究教育院を紹介するパ

ンフレットの最初のページに「大きな志を育てる」教養教育」と掲げました。これが本学のリベラル・アーツ教育です。

大切なのは、問題を解くことよりも自分で問いを立てること

上田 いまの世の中には、評価とか金銭的利益を重視する風潮があります。われわれ教員もそうですが、学生が評価を非常に気にするようになってきました。まず、入学するまでに、入試に出る科目以外は学んでいない。本学であれば数学・物理・化学・英語以外の、例えば高校の先生が『源氏物語』やドストエフスキーを薦めたり、世界史の面白さについて話しても、それは入試に出ないからやらないと。また、高校側でも、有名大学に何人入学したかで教員の評価が決まってしまうようになると、高校生が「文学や歴史なんて勉強せずに、物理や化学だけやっていたほうが先生の評価が上がりますよ」などと教師に向かって言ってしまうような雰囲気蔓延してきます。

大学のレポート出題でも、いまは、課題に対して自分が何を発見し、どう解決する

かを提示するというよりも、評価のためにレポートを書くという意識がキャンパスに横溢しているように感じます。

こうした学生の一層の問題は、自分で問いを立てられないということだと思います。誰かがつくった問いはエレガントに解くことができ、最大限の評価を得られる。しかし、自分で問いを生成することができない。自分の人生にはどんな使命があるのかとか、自分が科学技術を学ぶことによって、21世紀の社会をどう変えていくべきなのか、あるいは、どこかで苦しんでいる人々のために、どう役立つことができるかといったような、人間として根本的な問いを立てることができないのです。

こうしたことが、大きな問題を引き起こしてきました。この10年を振り返ってみても、例えば原発で事故が起きました。そこには、工学系では日本でもトップクラスの人たちや優秀な官僚が関わっていて、あれだけの危険性があることが分かっていたはずなのに、日本社会特有の同調圧力のためか、結局はそれを言い出せなかったのでしょう。つまり、みんながシステムの効率



化を進める中で、自らがシステムを構成する部品の一つになってしまったり、自由な発言ができないようなシステムの中に組み込まれてしまったのではないのか。

そうなると、私たちは自由な社会にいるといわれていますが、実は、そこにあるのは「システムを効率化するために自由に競争ができる」という意味での自由でしかなく、人間として自由な存在になり得ているのかという大きな疑問がわいてきます。理工学という大変大きな力を持っているが故

に、それがどのように使われるかということについて非常に敏感にならざるを得ない状況があります。

本来の意味で人間を自由にする。そして、理工学という大きな力を人類のために役立てる方向に持っていけるような教育は、どうしたらいいのか。2〜3年にわたって海外の大学などを視察したりしながら考えていて、2016年4月から、思い切った改革に取り組んでいるという状況です。

リベラル・アーツの中に造形美術のプログラムが設けられている米国の大学

林 現在のリベラル・アーツという考え方のそのものは、米国の大学のシステムを経由して生まれたという面が大きいと思います。ジョン・デューイの教育思想までさかのぼることができるのではないのでしょうか。

米国が日本と決定的に異なるのは、例えばハーバード大学やイエール大学をはじめとした総合大学に、ファインアートやアーキテクチャーといった造形美術や建築のプログラムが設けられていることです。日本では美術系の大学だけが教えている科目で

あり、一般の総合大学にはほとんどみられないものです。

そういう意味では、いま東京工業大学で行われているような、みんなと一緒に考えて何かをつくり上げていくディスカッションの場を設けるというようなことは非常に有効だと思います。

上田 MITでは音楽が副専攻にあります。

斉藤 「ハーバード大学は「音楽」で人を育てる」という本を読みました。同じようなところは多いそうですね。

林 明治時代に西欧の教育システムを日本に導入する際に、芸術の分野が完全に分離してしまっただけ。それは非常に不幸なことだったと思います。

斉藤 神戸女学院大学は、その前身である女学校が1875年に創立された時から、文学と音楽が柱になっていました。やはり、米国から来日した宣教師がつくった学校ですから。まさに、林先生がおっしゃったとおりだと思います。

市川 先ほどから「多様性」という言葉が何度か出ましたが、視点を変えることによって理解が深まるということがあります。

もうひとつ、「学生の啓発」という面を指摘したいと思います。啓発とは気付くことです。限られた知識や限られた情報の中で考えていると絶対に分らなかったことに對して、何かが異分野から入ってくることによって気が付き、一歩前進することができるといふ効果が絶対にあります。学生にもこのように説明すると、分かったとうなずきます。

また、上田先生のお話では、理工系の東京工業大学の学びが、従来であれば文系の学びに大きく入り込んでいたということでした。リベラル・アーツをより広く考えるということでは、昨今、文理融合といったことが文部科学省でもいわれているようですが、私は以前に「リベラル・アーツ思考と文系・理系の調和的世界」という記事を執筆したことがあります。

その中で主張したのは、日本では中学生の頃から、先生が、あなたは文系、君は理系という方向付けをしてしまう。そのため、大学に入学すると、私は文系ですから理系のことは分かりませんということになってしまします。私が大学で教えている自然科

学という科目は共通科目に入っていますが、文系の多くの学生が「先生の科目を受講できませんか」と聞いてきます。

日本の社会全体が、文系と理系できれいな縦割りの組織になっています。科学技術的な情報が人々に伝わりにくいのも、政府を含めて日本全体が縦割りになっているからだと思います。だからこそ、文系は理系の視点を、理系は文系の視点を持つべきでしょう。

人類の歴史は、一言でいえば実験の連続だと思っています。文学だって、『源氏物語』の頃から愛と憎しみを取り上げて、夏目漱石もトルストイもそれぞれの愛や憎しみを表現しています。まだ究極の愛は見つかっていないらしい。経済学も、リーマンショックをへて、新しい経済理論や経済政策を探索中です。科学技術も思想や哲学も、実験がずっと続いています。人類は、まだ究極のところを発見していない。結局、そうしたことは文系も理系も同じなんだ、文学も科学技術も真理探究を続けているんだということに、学生は気付いてほしいと思います。

「社会の役に立つ人材を輩出する」と大学が言つことの問題点

上田 本学の学長が世界のトップ10を目指すと宣言したことから、米国のマサチューセッツ工科大学（MIT）やカリフォルニア工科大学（Caltech）、ハーバード大学、英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学、あるいは米国の小さなリベラル・アーツ・カレッジなど、いろいろな大学を視察しましたが、日本の大学と米国のトップクラスの大学では、そもそも大学として掲げるミッションが異なっていることが分かりました。

日本の場合、「大学が社会の役に立っていない」と非難されたため、この20年くらいは「社会に役立つ人材を輩出する」と言い続けてきました。しかし、世界のトップ大学はそんなことは言わず、「21世紀を良きものにする」というようなことを言っています。大学が「社会の役に立つ」と言ってしまうと何が問題かというと、「社会にとって何が重要か」を考える主体は社会の側にあり、大学はそれに沿って人材を育成するか

ら投資をしてくれということになってしま
うからです。

21世紀を良きものにする大学を目指すとい
うことは、良い社会とはどういうものな
のか、そのために何をすべきかを大学が考
え、実践していく。つまり、考える主体は
大学にあるわけです。社会が考えたスキ
ームに沿って人材を育成するという姿勢とは、
だいぶ違うと思いました。

教員は、その研究活動においては批判的
精神、つまりクリティカルシンキングを持っ
ているかもしれないが、果たして大学自体
がクリティカルシンキングを持っている人
材を輩出しているかどうか。一流企業に大
勢就職したというのは、高校が難関大学に
何人入ったといっているのと全く同じです。
学生をどのように育てたかという内容が大
事なのに、評価主義や成果主義の下で、大
学も考え方が転倒していたのではないかと
気が付きました。

学生の批判的思考力が弱まり、質問もせ
ずに評価のことはかり考えている。そこを
何としても変えていかなければいけないと
思います。

昔の教養教育と、いまのリベラル・アーツ 教育の決定的な違いとは

林 「多様性」という言葉が出ましたが、確
かにそうだと思います。ただ、日本の教育
現場で多様性について議論をする、みん
なが予定調和とか平和共存といったこと
をイメージしながら話しているような感じを
いつも受けます。

しかし、多様性があるということは、か
なり大変なことです。そこに折り合いを付
けていく調停的な意見もあります。多様
性を推し進めていけばいくほどコンフリク
ト（衝突、葛藤）が発生して、調停不能に
なる場面もたくさん出てくるでしょう。現
場の者は、いつもそれを意識している必要
があります。こういった部分が、日本にお
ける多様性の議論ではいつもオブラートに
くるまれているような感じを受けます。

市川 それはよく分かります。要するに、
お互いにここまで分かったけれど、ここ
から先は理系に任せたほうがいいと見極め
るところまで議論をする必要があります。
林 それが「アンダースタンディング」と

いうことです。

山田 いまの議論は非常に納得できます。

一方、日本全体の現状を見ると、多くの大
学では10年くらい前から、教育課程を改革
する中で従来型の一般教養をやめてしまっ
て、専門教育をどんどん強化するという状
況になったり、あるいは東京工業大学のよ
うにきちんと一括してリベラル・アーツ教
育をする組織に変えたりしています。多様
性が必要だという状況は昔から変わってい
ないものの、大学全体としてみると、結果
的にはそれがなかなかうまくいっていない
という現状があるように思います。

そこで、昔の教養教育といまの教養教育
あるいはリベラル・アーツ教育の決定的な
違いは何なのでしょう。

市川 結局、以前は「広く浅く」と「狭く
深く」が相容れなかったのでしょうね。そ
れが、「A+B」から「A×B」という感じ
に少しはなってきたように思います。

山田 多くの大学では、教養教員という制
度を廃止して全員が専門教員になって、そ
の専門教員が教養も教えるという形にする
ことによって、「広く浅く」から「広く深

く」に変えようとしています。

上田 広さや多様性を教えればリベラル・アーツ教育になるとは、全く思っていない。いまは、カントもショーペンハウエルも読めるというような人材を育成しようとしているのではない。しかし、「広く深く」といったときに、「深く」というのは何かと考えると、それは学生一人一人にとってリベラル・アーツが自分の生き方を涵養するものとして、あるいはエンパワーするものになり得ているかどうかということだと思います。

いまの学生が、例えばレポートの評価軸はこうですと言われたとたんに、みんな同じレポートを提出してくるといった、ある種の過剰適応をした工業製品のようにみえる状況にあって、本当の人間性を取り戻していくためには、システムの中での無力感から回復するとか、自分も新しいものを創造できるんだという勇気づけがリベラル・アーツ教育全体の中に含まれている必要があると思います。

それをリベラル・アーツ教育といっているのかどうか。もしかすると、大学教育全

体に関わることなのかもしれません。しかし、教養教育の再編とはいわないでリベラル・アーツというときの「リベラル」という語感、つまり何かを自由にしてくれるものという雰囲気に着かれる部分があると思います。

学生は、一見すると元気にみえますが、実は無力感のようなものをだいたく感じているのではない。この大きなシステムの中で、自分は何も変えられないという絶望感を抱えている学生がどれだけののか。そういう学生に届くような教育をしないと、メニューを増やして幅広く教えるとか文理融合を進めるというだけでは、いま求められているリベラル・アーツ教育にはならないような気がします。

どこまでがリベラル・アーツなのか、 リベラル・アーツだけで完結すべきか

市川 「広く深く」といったときの「深く」とは、いろいろな分野を深く学ぶという意味よりも、自己を教育して自らを深く理解し育てるということだと思います。自分を意識しながら、多様性を取り込んで自分を

育てる。自己教育力といったような能力を育てる仕組みを、大学がつくっていくことが大事です。

山田 無力感という言葉が出ましたが、無力感を感じるような学生はまだ伸びしろがあるのではない。むしろ、そこまでいいないことのほうが多く、そうした学生こそリベラル・アーツ教育で動機づけをしていくことが大事のような気がします。

斉藤 「広く深く」ということを、まさに本学では実践しています。他学部の専門も、基準を超えるレベルまで理解していること。大事なことは、そこからつなげて広げることです。他の人とながつたり、自分自身の中でつなげたり、あるいは社会の中でつなげて広げるという意識がないと、ただ知識として学んだだけということになってしまいます。

山田 逆に、いまの学生に一番足りないものは何でしょうか。

斉藤 毎日が楽しくて充実しているという表面的なことよりも、もっと根本的な強さやたくましさ、真の優しさをもってほしいと思います。その部分が足りないように

感じます。本学はキリスト教主義に支えられており、4年間の学びの中で、人の力が及ばない畏敬の存在をどこかで意識するようになります。人知が及ばないことに對して、良い意味での覚悟と潔さが加わるのではないでしようか。

また、女性として、次世代を育てるという意識をもっと持つてほしい。次の世代を育てるということは明日の社会を築くことであり、健全な社会を次にバトンタッチするということ意識を育てたいと、いつも思っています。

上田 先ほど林先生がおっしゃいましたが、どこまでがリベラル・アーツなのか、リベラル・アーツだけで完結すべきなのか。私も宗教人類学者なのですが、自分を越えた大きいものの存在はとても重要だと思っています。一方、宗教とは別のところに、私の想像を超えた全く理解できないものもあります。

例えば現代アートでは、ある人が絶賛する作品でも、他の人にとっては神経を逆なでされるような不快なものではない場合もあります。自分は、これを受け入れられ

る人とは絶対に分かり合えないだろうということを理解することが重要なのではないでしようか。

林 まさにそのとおりだと思います。

大学の教養教育のミッションは「きっかけを与えることだけ」という理解

上田 絶対に分かり合えないものもあるんだという、ちよつとアナキーな視点もリベラル・アーツに取り入れる必要があるかもしれないません。多様性があつても、最終的



にはみんな理解し合えるようになるというレベルでとどまつてしまいうリベラル・アーツ教育には疑問を感じます。そうした視点を大学教育に取り入れることは可能でしようか。

林 難しいかもしれません。リベラル・アーツだけではなくて大学教育そのものが、思い通りに人を育てることなんてできない。リベラル・アーツ教育をして、多様性に触れて卒業していつてほしいと思つても、実際に短期間でそんなふうにつつ学生は、それほど多くはないでしよう。やはり、そこはきちんと理解しておく必要があります。

逆に言うと、大学の役割はきっかけを与えること、条件づくりをすることだと思ひます。それに対して、学生がどのくらい時間をかけてどのように反応するかは千差万別でしよう。みんなが同じような機会を与えられ、同じような多様性を身に付けて卒業していくということになると、それこそ均一化そのものです。

大学の教養教育のミッションは、きっかけを与えることだけだということをきちんと理解していないと、方向を誤る可能性

があります。

山田 まさにそれがポイントだと思います。あえて言えば、多様性の均一化になってしまふ危険性があり、それは何とかする必要があります。

多様性を認め合った上で

きちんと「ノー」が言えるたくましさ

市川 私の専門分野では、なぜ化学に興味を持ったかと学生に聞いてもすぐには答え

が返ってこないし、4年生になっても大学院に進んでも、まだ迷っている学生がいます。いまは、小・中・高は受験受験で、大学には白紙の状態で入ってきます。入学後に、先ほど林先生がおっしゃったようなきつかけを与える、そこがリベラル・アーツ教育の出番かもしれません。自分の得意なものや興味のあることを一緒になって見つけてあげる、という方向でしょうか。

斉藤 入学時には、自分が何なのか、何をやりたいのかが分からない。大学には、それを見つけられるさまざまな引き出しが用意されています。さらに、卒業後何年かたつてみて分かることもあります。その時のため

の養分を与えておくことが、大学の役目ではないかと考えています。理系の大学とは、ちよつと異なる点なのかもしれません。

また、学生のたくましさを育てると申しましたが、それは「きちんとノーが言えるたくましさ」です。多様性を互いに認め合った上で、ノーと言える。そのために必要なのは、知識であつたり感覚であつたりするわけですが、いろいろな経験をしてこそ言えることだと思っています。

林 リベラル・アーツ教育によって多様性を学ぶと、イノベータータイプな発想ができるようになるのではないか。既存の制度の中で優秀なのではなく、全く違った新しい発想から何かを生み出すという、上田先生がおっしゃった「問いを立てる力」ですよ。そういうったパラダイムシフトを起こせる学生が出てきてくれることを願います。しかし、おそらくそれは少数だとも思うのです。それも重要だと思いますが、一方では、原発や3・11の問題と関係しますが、自分のやっていることをもう少し大きい世界の中に位置付けてみる。大局的に見て正しいかどうかという倫理的な価値観を醸成する

仕組みがリベラル・アーツにはあつて、そこも非常に重要だと思います。

上田 いまおっしゃったようなことも関係して、本学では、1年次の第1クオーターで、「東工大立志プロジェクト」を開講します。これは、まず1学年1100人が木曜日に講演を聴きます。1回目が特任教授の池上彰氏、そして平田オリザ氏や哲学の永井均氏などの講師や、東南アジアでNPO活動をしている僧侶といった人たちです。次週の月曜には、学生を30人ずつ40のクラスに分け、それぞれにリベラル・アーツの教員が担任として付き、学生は4人一組になつて木曜に聴いた講演について徹底的に議論します。

そうすると、同じ講演を聴いても、一人一人が全く違う理解をしたことに気が付きます。また、講演の内容が難しすぎて4人中3人はあまり分からなかったのに、1人だけは完璧に理解していたりする。こんな人間が同じ大学の中にいるのかという、まさに一瞬一瞬が世界を変えていくような時間を入学直後に体験します。さらに、自分

いう志を、第1クオーターの6月に発表します。

1100人が4人一組で議論をすると教室からあふれて、学食や芝生広場といったようにキャンパスのいたる所で語り合うようになる。「全学の教養劇場化」と呼んでいますが、議論し協働する姿を他の学生が見て、刺激を受け、ポテンシャルを高めていくという意図もあります。

コア科目の第2段階は、3年次の第3、4クオーターで、教養卒論といって、全員がリベラル・アーツの卒論を書くようにしました。それまでのリベラル・アーツ教育を踏まえて、4年次の専門教育で何をやりたいかを再び発表します。そこに、修士課程の学生がチューターとして付いて指導をする。すなわち、修士課程の学生も、指導することによって学んでいくわけです。

さらには、博士課程にも教養科目を設けました。6人一組になって、特定の問題についてポスターセッションをつくります。博士課程になると留学生が4割、社会人学生が2割くらいになるので、そうした多様な学生が混じって共同作業をすることに

よって、多様性が確保されます。

現在は立志プロジェクトの1年目ですが、「志」の発表を聴いたところ、これまでの東工大生がほとんど言わないようなことを発表していて驚きました。例えば、世界で苦しんでいる人のために工学を活用したいとか、自分は高校の教員になりたいが、それは数学を教えたいからではなく、高校生の人間性を高めたいからであるといった内容の発表が2割くらいあったのです。

本学の学生はとてもスマートなので、従来であれば、こうした社会貢献のようなことを言ったら笑われるのではないかとという雰囲気がありました。しかし、今回、こうした発表を残り8割の1年生が聴くことによって、ここまで自由に自分の志を宣言してもいいのだと気付き、それ以降の学びに役立てるようになるのではないかと期待しています。

大学が社会の中で

どのようなプレゼンスを示しているか

山田 私が教えている専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科では、「賢い市民になら

う」という目標を担当教員間の共通認識としてあります。そこで、教養教育的な部分や専門教育の部分も含めてリベラル・アーツ教育を行っております。

市川 「賢い市民」ということは非常に大事だと思っています。いま、社会のグローバル化によって、文化や価値観が異なる環境に応じた判断や行動が必要とされています。日本を訪れる外国人もだいぶ増えましたが、実感としては、異文化とか価値観が異なる「外部」を受け入れたい部分が、まだ残っているように思います。先ほどから出ている多様な視点に基づいて、互いに尊重し合いながら受け入れていくというところから始まるのかなと感じるし、そこで自分の個性や独創性をもっと積極的に表に出していく。それが「賢い市民」にもつながるような気がします。

上田 リベラル・アーツというのは教育の話ですが、やはりわれわれの大学が社会の中でどのようなプレゼンスを示しているのかということと大に関係していると思います。私は10年前に『生きる意味』という本を出しましたが、その最終章に「役に

立たない学問の復権を」と書きしました。現代は全てのが金銭的価値で表され、どれくらいの利益を生むかという評価で社会が覆い尽くされようとしています。それに對し、役に立つとか利益を生むといった教育効果をアピールするのが本来の大学の姿だろうかという気持ちがありました。

人間としての根源的な部分が危うくなることによって、現代社会に不安が生じている。あるいは、政治的にはポピュリズムといった風潮が台頭する。そうした時代背景の下で、一見すると社会の役には立たないようにみえるリベラル・アーツが注目されているということは、人間の根源的な部分を大切にしなければいけないという反省が社会にあるのではないか。大学としての使命もそこにあるのではないかという直感が、確信に変わってきたように感じます。

そうした意味で、リベラル・アーツ教育への志向は今後もどんどん広がるし、大きな意味で社会の役に立つことになります。しっかりした人間を育てる場があるということを示すことが、教育内容という枠を超えて、大学としての社会的なプレゼンスを

示すことにもつながると感じています。

斉藤 学生には、まず知ることの楽しさを伝えたいと思います。その上で、知識がスタンダードアローンではなく、全てがどこかで連携しているということを、折に触れて示していくことが必要です。最後に、教員自身が知らないことを知るように努力することが非常に重要です。また、国の重要文化財に指定されている本学の美しいキャンパスで日々の授業を受けることを通して身に付く感性は、本学ならではのものと自負しています。

林 私は美術史が専門なので、リベラル・アーツもそういう面から考えることがあります。例えば印象派の絵画の第1回の展覧会が開かれたとき、セザンヌの絵に対して、これは狂人が描いたものだという批評が新聞に載りました。しかし、30〜40年後になってみると、その絵が20世紀の美術の歴史を決定づけるほどの影響力を与えたことが誰の目にも明らかでした。そうしたことを考えると、やはり価値観の多様化そして変更可能性というのは大変なことです。

また、「ノーと言える力」という話題が出

ましたが、英語には「I agree to disagree.」という言い方があります。あなたとは意見が違っても、それでいいという意味ですが、この disagree する力を重視していいような気がします。英語なら気軽に言えても、日本語で「私はそうは思わない」と言うのは難しい。

日本の文化は同調圧力が本当に大きいので、それを相対化する視点をリベラル・アーツ教育が育てていかなければいけないと思います。

大学が社会に提供する有効性という問題も、有効性の枠組みそのものを根本的に疑うような視点を身に付けることが重要であって、無用に見えるものや怪しいものも大事だと言えるくらいまで人間的な間口を広げてあげるのが、リベラル・アーツ教育の役割のような気がしています。

山田 リベラル・アーツ教育は社会の土台をつくる重要な教育課程でもありますので、先生方にはいっそうご尽力いただきたいと思っています。

本日は、ありがとうございました。